
新宿巡査

伊藤 薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新宿巡査

【Nコード】

N2096Y

【作者名】

伊藤 薫

【あらすじ】

欲望うずまく、ネオンに溢れた街―新宿歌舞伎町。その街に務めたひとりの「強い」警官の肖像。真壁仁、新宿西署時代の記憶。

1

先週の日曜日の埋め合わせについて話している時だった。

奈緒子が行きつけのバーの場所を説明すると、彼女の幼なじみは当たり前のように言い切った。

「コマ劇場の右手奥って言ったな。そしたら、『ロワイヤル』だろ？」

奈緒子は驚いた。

「えっ、知ってるの？」

「昔、巡回でよく回ったんだ。オーナーの高見さんは元気か？よろしく伝えておいてくれ」

真壁はそう言つと、電話を切った。奈緒子はキツネにつままれたような表情を浮かべた。

2

「ロワイヤル」は、新宿歌舞伎町の中心―コマ劇場の一角に隠れるようにして構えている。ビルの地階にある店舗は程よい広さで、奥にはステージもあり、さながら小さなライブハウスといった風情だった。

「真壁さんですか？ああ、よく覚えているよ。あれはたしか6年くらい前じゃないかな・・・」

カウンターの中で、オーナーの高見謙吾は顔を天井に向けながら、過去のことを思い出そうとしていた。その隣で若いバーテンが細長い首のグラスにカクテルを注ぎ、グラスをカウンター滑らせた。

「ご注文のモスコミュールです」

「ありがとう」

奈緒子は礼を言い、カクテルを一口ふくんだ。

「それにしても、世の中は狭いよね。奈緒子ちゃんがあの真壁さんの幼なじみだなんて」

高見が笑いながら言った。

奈緒子は看護師の研修で、新宿の病院で働いていた時期があった。そのとき、看護師の先輩から「ロワイヤル」を紹介され、その頃から奈緒子はこの地下のバーに通っていた。

「マーちゃんて、どんな警官だったの？」

「なんていうのかなあ・・・強い警官だったよ、真壁さんは。最初に会ったときなんかはもう・・・すごかったなあ」

高見は真壁との出会いを話し始めた。

3

6年前のある夜、高見がそろそろ閉店にしようと店内を清掃していた頃、人が慌てて入ってきて「バーテンがヤクザにからまれて、やられてる」と言った。

高見が表に出ると、ビルの隅に置かれたゴミ袋の上に、ついさっき帰ったはずのバイトのバーテンが顔から血を流して伸びていた。

「オラァ！」と奇声とともに、バーテンの顔に拳が飛んだ。高見は思わず顔を背けた。殴っている男は角刈りで、右のこめかみに小さな切り傷が残っていた。高見が勇気を振り絞って止めようとする、男は酒臭い息を吐きながらすごんだ。

「ああん、アンタもやられたいのか!？」

高見は体がぶるりと震えた。その反応に満足すると、男はバーテンの胸ぐらを掴んで拳を繰り出した。

周囲が途方に暮れていると、落ち着いた声が響いた。

「やめるんだ」

高見は驚いて、振り向いた。

背の高い警官が立っていた。制帽を深くかぶっていたので、その

表情はほとんど分からなかったが、ひさしの奥からは猛禽類を思わせる鋭い視線が男に向けられていた。

ヤクザも背後の警官に気付き、いったん拳を止めると怒鳴り散らした。

「マツポが何の用だってんだ！てめえもブツ殺すぞ！」

「やめろと言っているんだ。周りが迷惑している」

そう言いながら、警官は高見を押しつけて男の前に立った。

「テメエには関係ネエよ、黙ってな！」

ヤクザはそう吐き捨てると、警官の胸ぐらをつかみ、血まみれの拳を振り上げようとした。

その瞬間、警官は拳の手首を掴んで、一気にひねった。骨が鳴る小気味いい音が響いて、ヤクザが悲鳴を上げた。そして、警官はヤクザの脚をさつと払って地面に押し倒した。ヤクザの顔に冷や汗が浮かんでいた。

「やめろと言っているんだ」

警官は低く重い声を発した。

ヤクザは手首の痛みからか口をパクパクさせるだけで、答えることができない。

「お前みたいなヤツをいちいち引っぱっていたら、キリがない。はやく眼の前から失せることだ」

警官はそう告げると、手首のいましめを解いた。ヤクザは痛む手首を抑え、泡を食ったように走って逃げていった。

4

奈緒子と言った。

「その警官が、マーちゃんだったの？」

「そう。あとで聞いたら、びっくりしたもんだよ。あの時が初めての勤務日で、手首をひねったのはとっさの判断だったって言ったんだ」

高見は興奮したような口ぶりだった。

「真壁さんは、悪さする人にはいつさい容赦がなかった。駐車違反やキャッチでも、すごく厳しく取り締まっていたなあ。やり過ぎじゃないかなと思ったこともあったけど、そのおかげでこの辺はだいぶ変わったんだ」

カウンターの奥から、電話の鳴る音が聞こえた。高見はいったん奥の部屋に入り、しばらくすると戻ってきた。

「噂をすれば、本人からだった。今日は、来れないって」

奈緒子は頬を膨らませた。

「まったく、マーちゃんったら、何考えてんのかしら」

もともと今夜は先週の日曜日、デートをするはずが真壁が急に本庁に呼び出されておじちゃんになった埋め合わせをするはずだった。

「もう、あつたま来た。マスター、強いお酒ちょうだい」

奈緒子は絡むような調子で、高見に言った。

「だったら、真壁さんが飲んでいた洋酒をオススメするよ」

「マーちゃん、洋酒なんて飲むの？」

「洋酒を覚えたのは、山登りがきつかけだって言っていたな。冬山で一晩過ごすことになったとき、友人に勧められたそうだ。これをよく飲んでいたよ」

高見はそう言うところの棚に振り返り、琥珀色の液体が詰まった瓶を取り出した。キャップを開け、その液体をショットグラスに人差し指一本分の厚さだけ注いだ。

「バラнтаインの１７年。彼はそれをストレートでいくんだ、どうぞ」

高見はグラスをカウンターに滑らせた。

最初に、バニラに似た甘い香りが感じられた。奈緒子はグラスに口づけ、くつと喉を上げた。甘いと思った瞬間、燻したような香りが鼻腔をかけぬけた。

「ブレンデッドだから、あまりキツくないでしょ」

奈緒子は高見にうなずこうとしたが、複雑な味わいの後に来た長

い余韻に思わずうつとりしていた。

この豊潤な香りなら、なにかも忘れそうになる。新宿歌舞伎町で、警官として務めた幼なじみがこのバーでこの洋酒を傾けながら、ゆっくりと翼を休める姿が自然と脳裏に浮かんだ。

（後書き）

私感ながら、今まで書いてきた中で、最も「ハードボイルド」な雰囲気があります。

わずかな時間でも楽しんでいただけたら、幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2096y/>

新宿巡査

2011年11月4日12時10分発行